〔訳註7〕「そもそも、パレスチナの住民を『ユダヤ人』と『非ユダヤ人』に二分する考え方は、ヨーロッパから持ち込まれたものなのだ。現地の人々が『アラブ人』という場合は、ムスリム、キリスト教徒だけでなく、ユダヤ教徒もふくんでいた。」（奈良本英佑著『君はパレスチナを知っているか』、はるぶ社、一九九七）

〔訳註8〕ユダヤ人の戦争協力をとりつけるために、パレスチナにユダヤ民族郷土建設を約束したバルフォア宣言のこと。前年の一九一六年には、英、仏、露で戦後の領土分割を決めたサイクス・ピコ秘密条約を結び、さらにその前年にはアラブの協力をとりつけるために、アラブ独立国建設を約束するマクマホン書簡を出すなどの英国の三枚舌外交が、パレスチナ問題ばかりか、現在のISIS問題などの元凶となった。

〔訳註9〕一九一一～一九六七。オスマン帝国下、英国信託統治下で最も影響力があった日刊紙で、アラビア語版と英語版があった。反シオニズム、パレスチナ民族主義を基調としていた。

第二章　ユダヤ人は土地なき民族であった

前章で論じた「パレスチナは無人の地であった」という神話は本章のテーマ「ユダヤ人は土地なき民族であった」という神話と表裏一体の関係にある。

そもそも、ユダヤ人入植者は一つの民族だったのか？　ユダヤ人が民族かどうかは何年も昔に提起された疑問だが、最近の研究で再びそれが取り上げられた。よく知られたこの重要問題は、シュロモー・ザンド著〔訳註1〕『ユダヤ民族の発明』[1]（*The Invention of the Jewish People*）の中で見事にまとめられている。ザンドは、近代史のある時点でキリスト教世界が、自分たちの都合のために、ユダヤ教徒はいつの日か聖地へ帰還すべき民族であるという考え方を支持した、と書いている。彼によれば、この帰還は終末へ向かっての神の企図の一部で、それには死者の蘇りとメシア（キリスト）の再臨を伴う。〔訳註2〕

十六世紀に起こった宗教改革がもたらした神学的・宗教的大激動から、千年王国（ミレニアム）〔訳註3〕の終わり

とユダヤ教徒のパレスチナ帰還及びキリスト教への改宗という道筋が、特にプロテスタントの間に生まれた。十六世紀英国の聖職者トーマス・ブライトマンは「彼ら〔ユダヤ教徒〕は再びエルサレムへ戻る。それは明らかである。預言者たちが至る所でそれを語り、確認している」と書いた。[2] ブライトンは神の約束の実現を望んだだけではない。彼の後に続く多くの宗教者と同じように、ユダヤ教徒がキリスト教に改宗するか、そうしないなら一斉にヨーロッパから出て行くことを望んだ。一〇〇年後には、ドイツの神学者で自然哲学者のハインリッヒ・オルデンブルグが、「人間に関する事柄に必然的に付き纏う変化が機会を提供することがあれば、「ユダヤ教徒が」王国を再び立ち上げることだってあるだろう……再び神が彼らを選ぶかもしれない」と書いた。[3] オーストリア・ハンガリー帝国陸軍元帥であったリーニュ侯爵シャルル・ジョゼフは十八世紀後半に次のように書いた。

> 私はユダヤ教徒がキリスト教徒に改宗することはないと思う。彼らはどこにいても民族の中の民族、国民の中の国民を絶えず形成するだろう。だから、単純に彼らを大昔に追い出された場所に戻すことが、最善策だと私は思う。[4]

この引用文から読み取れるように、これらシオニズム形成的発想と伝統的な反ユダヤ主義の

間の関連は明らかであった。

ほぼ同じ時期に、著名なフランス人作家で政治家のフランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアンが、ユダヤ人は「ユダヤの地の正統的な主人」だと書いた。[訳註4] [訳註5] ナポレオン・ボナパルトは彼の影響を受けた。十九世紀初頭、中東征服の過程で、パレスチナの住民はもちろん、ユダヤ教徒コミュニティの協力を得ることを望んだ。彼はユダヤ教徒に「パレスチナへの帰還」とユダヤ人国家樹立を約束した。[5] これらのことからわかるように、シオニズムはユダヤ人の入植運動になる前に、キリスト教徒の植民地プロジェクトだったのである。

これらの外見上は宗教的で神話的な発想が植民地主義と強奪という現実的計画に具体化する不吉な徴候が見え始めたのは、一八二〇年代のビクトリア時代の英国においてであった。パレスチナを奪取してキリスト教領とする戦略計画の真ん中に、ユダヤ教徒をパレスチナへ帰還させるという神学的・帝国的な運動が出現していた。この考え方は十九世紀の英国でどんどん盛り上がり、大英帝国の公式政策に影響を与えた。「パレスチナの地は……そこから追放された子どもたちの帰還を待っている。農業だけでなく工業も応用すれば、〔パレスチナは〕再び全般的繁栄へと返り咲き、ソロモンの時代のパレスチナが再来する……」と、スコットランドの貴族で軍司令官であったジョン・リンゼイが書いた。[6] この思いは英国人思想家デイヴィッド・ハートリーの作品にも反映されていた。「ユダヤ民族はパレスチナへ戻れば再建されるかもしれ

ない」と、彼は書いた。[7]

しかし、ユダヤ人をパレスチナに送還する計画は、米合衆国が参加するまで、必ずしも順調に進んだわけではなかった。米国も、ユダヤ民族はパレスチナへ帰ってシオンを建設する権利があるという考え方を引き継いだ。ヨーロッパでプロテスタントがその考えを吹聴していたとき、大西洋の反対側でもそれが現れていたのだ。米大統領ジョン・アダムズ（一七三五～一八二六年）は「私はユダヤ人がヘロデ王国があったユダヤの地に再び独立国家を作ることを望む」と言った。[8] この思想を語った聖職者たちの単純な発想が、パレスチナの運命を変える力を持った世俗的権力者へとつながっていったのだ。その権力者たちの中で特筆すべき人物は第七代シャフツベリ伯爵（アントニー・アシュリー＝クーパー、一八〇一～一八八五年）であろう。[訳註6] 彼は、パレスチナにおける英国のプレゼンスを高めることは宗教的であると同時に戦略的であると説いた。[9]

すぐに説明するが、この十九世紀中葉のシャフツベリ伯爵の宗教的情熱と社会改良への情熱との危険な結合が、一九一七年のバルフォア宣言へとつながったのである。彼は、英国がユダヤ人のパレスチナ帰還に賛成するだけでは十分ではなく、彼らのパレスチナ入植を具体的に援助すべきだと考えた。ユダヤ人がオスマン帝国領パレスチナへ移住するのを財源的に援助することから、英国キリスト教徒とユダヤ人の連携を始めるべきだと主張した。彼は、エルサレムの英国国教大主教センター大聖堂を説得して、最初の献金を出させた。これは、彼の義父であり、英国外相で、後に首相になった第三代パーマストン子爵（ヘンリー・ジョン・テンプル）の同意と協力を取り付けたから可能になったのであり、英政府の協力がなければ教会は金を出さなかっただろう。一八三八年八月一日の日記で、シャフツベリは次のように記している。

夕食会でパーマストンと同席。食後二人きりになった。私は計画を説明し、彼は興味を示した。二、三質問した後、彼はそれ［ユダヤ人のパレスチナ帰還を援助し、パレスチナを英国支配領とすること］を検討すると即座に約束した。神の為せる業はなんと非凡なことか。もちろん人間の目から見て非凡なのだが。パーマストンはすでに選ばれし古代の民にとっての善の道具として選ばれていたのだ。その民の運命を信じていないのに、彼らの遺産に敬意を表し、彼らの権利を認める善の道具として、神から選ばれていたのだ。彼が為すのはそれだけではないように思える。確かに彼は善意から動くのだろうが、必ずしも健全な動機だけではない。私もやむなく政治的な言葉、経済的な言葉、商業的な言葉を使って説明せざるを得なかった。彼は、主イエスのようにエルサレムのために涙することはないし、[訳註7] シオンよ、輝く衣を纏え、と祈ることもないだろう。[10]

シャフツベリは、第一段階として、自分の弟子の復興主義者（パレスチナにおけるユダヤ民族復興を主張する運動に従事する者）ウィリアム・ヤングを駐エルサレム英国副領事第一号に任命するように、パーマストンを説得した。それについて、シャフツベリは「何と素晴らしいことだ！　神の民の古代都市が復活し、諸国家の中で一つの地位を獲得することになるのだ。しかも、英国が、『神の民を差別する』のを止める最初のキリスト教国となるのだ」と、日記に書いた。[11] それから一年後の一八三九年、シャフツベリは「ユダヤ民族の国家と復活」（State and Restauration of the Jews）と題する三〇頁の論文を『ザ・ロンドン・クオータリー・レビュー』で発表した。その中で、神が選んだ民にとって新しい時代が到来することを予言、次のように主張した。

> もっともっと多くのユダヤ人に帰郷を奨励し、彼らが再びユダヤとガリラヤの農夫になるようにしなければならない……残念ながらユダ人は強情で歪んだ性格の民族で、道徳的に退廃し、頑固であり、聖書の福音書について無知な人々であることを認めざるを得ないが、それでも救いに値するし、そもそも救いの望みはキリスト教徒にとって欠かすことができない徳である。[12]

シャフツベリのパーマストンに対する丁寧なロビー活動は成功した。パーマストンもユダヤ民族復興論者になったが、それは宗教的理由からではなく政治的理由からであった。彼の思考要因となったのは、「没落しつつあるオスマン帝国の崩壊を促進するうえでユダヤ人が役に立つので、ユダヤ人のオスマン帝国領パレスチナへの帰還を推し進めることは、英国の中東政策の中核的目的の実現に資する」という考えであった。[13]

一八四〇年八月一一日、パーマストン外相は、ユダヤ人のパレスチナ帰還を許可することはオスマン帝国と大英帝国両国の相互利益になることをオスマン・トルコ皇帝に進言せよと指示する書簡を、駐イスタンブール英国大使に送った。ユダヤ民族のパレスチナ移住はオスマン帝国の崩壊を防ぎ、現状を維持する重要な手段であると説く、実に皮肉な書簡であった。

> 現在ヨーロッパに分散しているユダヤ人の間に、いよいよパレスチナ帰還の時が近づきつつあるという考えが広まっています……ユダヤ人帰還の奨励がオスマン・トルコ皇帝と政府にとって非常に重要な意味をもつことは明白です。ユダヤ人が持ち込む富が帝国の資源を豊かにすることは確実です。それに、皇帝の許可と保護と積極的な奨励でユダヤ人がパレスチナに帰還・定住すれば、彼らがモハメット・アリや彼の後継者が将来オスマン帝国に対して起こすかもしれない邪まな謀反を抑える機能を果たすでしょう……従って、私は、

大使閣下がオスマン帝国政府に対し、ヨーロッパ・ユダヤ人にパレスチナ帰還の手を差し伸べるように進言することを指示します。[14]

モハメット・アリというのは、一般にはムハンマド・アリとして知られるオスマン領エジプト総督で、十九世紀前半にオスマン帝国からエジプト統治を割譲された。パーマストン卿が駐イスタンブール英国大使に書簡を送った頃には、総督アリが独力で同地におけるオスマン皇帝の力をほぼ転覆してすでに一〇年が経過していた。そんなときに、パレスチナに入れたユダヤ人の富がオスマン帝国を外部及び内部の敵から守るという発想は、シオニズムが反ユダヤ主義、英帝国主義、神学理論と結びついたものであることを明白に示すものであった。

パーマストン卿が大使へ書簡を送ってから数日後、「ユダヤ民族を祖先の地へ入植させる」計画を呼びかける社説が『タイムズ』に出た。この計画は「真剣な政治的配慮」のもとで生まれたもので、その計画の父としてシャフツベリの尽力を褒め称え、「現実的で、政治家らしい叡智」に溢れたものと評した。[15] パーマストン夫人も夫の考えを支持した。彼女は友人への手紙の中で、「私たちには熱狂的なユダヤ教徒分子が味方についています。彼らを支持する者たちがこの国にいます。彼らはエルサレムとパレスチナ全土がユダヤ民族の帰還地として用意されるべきだと頑なに信じています。ユダヤ民族復興が彼らの唯一の願いなのです」と書いた。[16] かくして、シャフツベリ伯爵は「十九世紀最大のキリスト教シオニズム主唱者で、パレスチナにユダヤ人が民族郷土を建設する道を開拓した偉大な政治家」として描かれるようになった。[17]

この英国政権のユダヤ民族復興思想をプロト・シオニズムと名付けてよいだろう。十九世紀の現象を現代のイデオロギーに読み込むことには慎重にならなければならないが、それでもそこには先住パレスチナ住民を抹消し、その基本的権利を否定することを正当化する現代イデオロギーの構成要素がすべて含まれていた。もちろん、地元パレスチナ住民と一体感を抱く教会や牧師たちも存在した。中でも有名なのは英国教会牧師のジョージ・フランシス・ポパム・ブライスで、彼は、仲間の高位の聖職者たちといっしょに、パレスチナ人が抱く希望と権利に対して強い共感を抱いて活動した。一八八七年に彼は聖ジョージ・カレッジを設立した。この学校は東エルサレムで最良の高等教育学校として今も存続している（地域実力者の子どもたちがここで学び、二十世紀前半にパレスチナ政治世界で重要な役割を担った）。しかし、パレスチナ人に味方する英国人牧師の力は、ユダヤ人に、後にはシオニストに協力した英国人牧師たちの力に比べると、微弱だった。

最初の英国領事館は一八三八年エルサレムに開かれた。領事館は、非公式の使命として、ユダヤ人のパレスチナ移住を奨励し、ユダヤ人を保護し、場合によってはユダヤ人のキリスト教への改宗を試みた。初期の領事で最も有名な人物はジェームズ・フィン（一八〇六～七二年）で

ある。彼の性格と露骨なやり方のために、領事館の非公式な使命をパレスチナ人から隠蔽することはできなかった。彼は、ユダヤ人をパレスチナへ帰還させること、そのためパレスチナ人を追放することを公然と文書化した。おそらく、そういうことを平然とやってのけた最初の人物であっただろう。[18] これが、二十世紀のシオニスト入植者殖民プロジェクトの中核となった。

フィンのエルサレム駐在は一八四五～一八六三年であった。彼は後世のイスラエル人歴史家からユダヤ人が祖先の地へ帰るのを援助した人物として称賛され、彼の回顧録はヘブライ語に翻訳された。もっとも、一つの民族の名誉の殿堂に飾られ、他の民族の犯罪者リストに名を残した歴史的人物は、フィン以外にもかなりいるが。フィンはイスラム全体を嫌悪し、とりわけエルサレムのアラブ人名士を憎悪していた。アラビア語を学ぼうとはせず、常に通訳を通して伝達するだけだったので、土地のパレスチナ住民との関係は円滑ではなかった。

フィンにとって助けとなったのは、一八四一年にマイケル・ソロモン・アレキサンダー（ユダヤ教徒からキリスト教徒への改宗者）を主教とする英国教会主教区がエルサレムに設置されたこと、さらに一八四三年に最初の英国教会の教会がエルサレム旧市街のヤッフォ門近くに建立されたことであった。後年これらの宗教機関はパレスチナ人の民族自決権へ共感を持つようになったが、当時はフィンのプロト・シオニズム的野心に協力していた。フィンはエルサレムに恒久的な西洋のプレゼンスを確立することに他のヨーロッパ人以上に熱心で、キリスト教布教活

動、西洋民間人の商業活動、英政府機関のための土地と不動産購入を組織的に行った。

こういう初期の、主に英国を中心としたキリスト教シオニズムという芽と本格的なシオニズムを結びつける環となったのが、一八六〇年代から第一次世界大戦勃発時までパレスチナで活動したドイツのテンプル敬虔主義運動（後に「テンプラーズ」と呼ばれた）であった。この敬虔主義運動は、北米を含む世界中に広まっているドイツのルター宗教改革運動から生まれた（初期北米の殖民・植民地主義に対する影響は今も顕著に見られる）。テンプラーズがパレスチナに関心を抱いたのは一八六〇年代であり、クリストフ・ホフマンとゲオルグ・ダヴィド・ハルデッグという二人のドイツ人牧師が一八六一年にテンプル協会（Tempelgesellshaft）を立ち上げた。二人はヴュルテンベルグの敬虔主義運動とつながっていたが、自分たちのキリスト教解釈に基づく活動を展開するために独自の計画を開発した。彼らは、エルサレムにユダヤ教徒の神殿（テンプル）を建立することこそ贖罪と赦しという神の構想を実現する第一歩だと考えた。もっと大切なことは、自分たち自身がパレスチナに住み着くことがメシアの再来を促進すると考えたことだ。[19] 敬虔主義を実践する教会や各国の宗教団体のすべてが彼らのパレスチナ入植を敬虔主義運動とする解釈を支持したわけではなかったが、プロイセン王国の権力者や英国教会神学者の一部が彼らの教義を熱狂的に支持した。

テンプル運動が目立ち始めると、ドイツのほとんどの体制的教会が迫害側へ回った。しかし、

テンプラーズは自らの思想を具体化し、パレスチナへ移住していった——その過程で互いに争い、同時に新しい参加者も獲得した。一八六六年最初の入植地をハイファのカルメル山に建設、その勢いで他の地域にも入植地を作った。十九世紀末ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世[訳註9]とオスマン・トルコ皇帝の親交が深かったおかげで、彼らの入植地建設事業に拍車がかかった。テンプラーズはパレスチナが英国信託統治下に置かれた時代も存続していたが、一九四八年に建国されたユダヤ人国によって追い出された。

初期シオニストたちはテンプラーズの入植方法や入植地経営を模倣した。ドイツ人歴史家アレキサンダー・ショルヒはテンプラーズの入植活動を「静かなる十字軍」と呼んだが、[20]一八八二年以降に建設された初期シオニスト・コロニーは決して「静か」ではなかった。[訳註10]テンプラーズがパレスチナに入植した頃、すでにシオニズムはヨーロッパで顕著な政治運動になっていた。一言で言えば、シオニズムとは、パレスチナを植民地化し、そこにユダヤ人国を作ることで、ヨーロッパのユダヤ人問題が解決できるという主張であった。この発想は、啓蒙主義運動、一八四八年の「諸国民の春」[訳註11]、そして後になって社会主義によって刺激され、一八六〇年代にヨーロッパのいくつかの場所で生まれた。シオニズム思想は一つの知的・文化的運動から、テオドール・ヘルツルの思想（ヘルツル著『ユダヤ人国家』）によって政治的プロジェクトに変化した。これは、一八七〇年代後半から一八八〇年代初期にかけてロシアや東欧で

燃え盛った苛酷なユダヤ人迫害（ポグロム）と、西ヨーロッパでも反ユダヤ主義的ナショナリズムが台頭したことへの反応であった（特にフランスのユダヤ系軍人ドレフュスに対する差別裁判は、反ユダヤ主義がフランスやドイツの社会に深く根付いていることを明らかにした）。

ヘルツルや同じような考えを持つユダヤ人指導者のロビー活動などにより、シオニズムは国際社会から認められた運動となった。しかし、初めは、東ヨーロッパのユダヤ人グループがヨーロッパのユダヤ人問題を解決する道として同じような考えを抱いて自立的に始めたものであり、国際社会の承認など求めなかった。[訳註12]彼らは居住国でコミューン生活を行って地固めし、一八八二年からパレスチナ移住を開始した。これは、シオニズム用語で、第一次アリヤーと呼ばれるシオニスト移住の第一波であった。第二波（一九〇五～一四年）は第一波と同じく実践的シオニズムだが、質的に異なっていた。移住者の中心になったのは行き場を失った共産主義者や社会主義者で、彼らはシオニズムを単にユダヤ人問題の解決策として見るだけでなく、パレスチナの集団入植地で社会主義・共産主義を先鋭的に実践するものと考えた。しかし、どちらのアリヤーでも、移住者の大多数は都市部に住み、パレスチナ人やアラブ人不在地主から辺境の土地を購入して耕したのは一握りの人々であった。しかも、初めのうちはヨーロッパのユダヤ人企業家の援助に依存した生活であり、経済的に自立する道を模索し始めたのは、後になってからであった。

結局シオニストとドイツの結び付きは影が薄くなり、代わって英国との結びつきが重要になった。シオニズム運動は、現実問題としても、強国の支援を必要とした。なぜなら、この特殊な形態の移住はこの国の未来にとって悪いことが起きる前触れではないかと、先住パレスチナ人が感じ始めたからだ。地元有力者たちは、ユダヤ人の大量移住は自分たちの社会に非常に好ましくない結果をもたらすと、心配し始めた。その一人がエルサレムのムフティ（イスラム指導者）ターヒル・アル＝フサイニー二世であった。[訳注13] 彼は、ヨーロッパ・ユダヤ人のエルサレム移住をヨーロッパによるムスリム聖都攻略ではないかと疑った。すでに彼の先輩指導者たちの間でも、ユダヤ人移民を通じて十字軍の栄光を再興しようとするのがジェームズ・フィンの野望だという見方があった。だから、彼はユダヤ人の移民に反対し、土地を売らないように強くムスリムに訴えた。ユダヤ人が土地を所有すれば正当な権利を主張できるが、入植地を建設する土地を持たないユダヤ人は単なる聖地巡礼者として扱えると考えたのだ。[21]

かくして、ユダヤ人のパレスチナ移住を英国の「聖地」掌握を深める手段と考える帝国戦略の勢いと、新しい文化的・知的シオニズム思想がヨーロッパ各地で誕生していく勢いとが、多くの点で、合致した。キリスト教徒、ユダヤ教徒の両者は、パレスチナ植民地化を、帰還及び神との約束の実行だと見たのだ。二つの勢いの合致から強力な同盟関係が生まれた。この同盟関係を通じて、反ユダヤ主義及びユダヤ教徒をヨーロッパからパレスチナへ「トランスファー」（移転）するという千年王国思想が、現実的な入植地建設事業へと変形し、先住民パレスチナ人を犠牲にしたのである。この同盟関係は、一九一七年一一月二日のバルフォア宣言で、世界に知れ渡った。英国外相バルフォアが、英国はパレスチナにユダヤ人民族郷土を建設することに全面的に協力することを約束すると書いた書簡を、英国のユダヤ人社会指導者に送ったのである。

英国のアーカイブが利用し易く便利な仕組みになっているおかげで、バルフォア宣言の背景を研究した優れた文献を多く見ることができる。中でも秀逸なのはエルサレムのヘブライ大学のマイヤール・ヴェルタが一九七〇年に著した論文である。[22] 彼が特に明らかにしたのは、ボルシェヴィキ運動の中のユダヤ人指導者もシオニストと同じ願望を持っているだろうから、バルフォア宣言は親シオニズム宣言であり、ロシアで誕生した新しい政権と親交を結ぶ道を開くものだ、と英政府が見当違いの判断をしたことだ。さらにもっと重要なことは、バルフォア宣言に表現されている英国の姿勢が、米国内で大きな政治勢力を持っていると英政府が思っていた米国のユダヤ人から歓迎されると考えたことだ。それに、バルフォア宣言には、千年王国思想とイスラム嫌悪の混合が内包されている。当時の英国首相で信心深いキリスト教徒だったデヴィッド・ロイド・ジョージは、宗教的理由でユダヤ人のパレスチナ帰還を支持した。彼と彼の同僚政治家たちは、聖地にムスリム・コロニー（彼らはパレスチナ人社会をそのように見た）ではな

くユダヤ教徒コロニーを望んだのである。

最近になって、一九三九年に書かれたより包括的な論文が発見された。ずっと行方不明だったのだが、二〇一三年に見つかったのだ。英国人ジャーナリストのJ・M・N・ジェフリーズの『パレスチナ――その現実』(*Palestine: The Reality*)で、七〇〇頁以上を費やしてバルフォア宣言の背景を論述したものである。[23] ジェフリーズの個人的コネクションやもう現存しない大量の資料類を通じて、まさに英国海軍、英国陸軍、英国政府のどういう人物がバルフォア宣言に関わり、何故関わったかを詳述している。これを読むと、英国が主導してユダヤ人をパレスチナに入植させることについては、当事者であるシオニストよりも親シオニズム・キリスト教徒の方が熱心であったことが窺われる。

バルフォア宣言に関するこれまでの研究から導き出せる結論は、英国の政策決定者たちが、パレスチナにユダヤ人郷土を建設することが同地における英国の戦略的利益と一致すると考えたことだった。英軍がパレスチナを占領支配すると、前述した同盟関係のもとでユダヤ人は、英国の後援と女王陛下軍隊の銃剣に守られて、ユダヤ人国のためのインフラ建設を進めることができた。

しかし、パレスチナ攻略は簡単ではなかった。英国軍のトルコ軍撃退は一九一七年ほぼ丸一年かかった。初めのうちは、シナイ半島を北上して快進撃したが、ガザ回廊とビール・サバ

〔ベエルシェバ〕の間の戦線で、一進一退の塹壕消耗戦となった。やっとこの膠着状態を克服した後は、万事好調で、エルサレムは事実上戦闘無しで獲得できた。エルサレム占領開始とともに、三つのイデオロギー――シオニズム、プロテスタントの千年王国思想、英帝国主義――がパレスチナに上陸、その後三〇年間かけてその国と住民を破壊し続けた。

一九一八年の英軍のパレスチナ占領を受けてシオニストとしてパレスチナに移住したユダヤ人が本当に二〇〇〇年前にローマ軍に追放されたユダヤ人の子孫なのかと疑う人々が出現した。この懐疑は、ハンガリーのユダヤ人学者アーサー・ケストラー(一九〇五～八三年)が書いた本から発したもので、大きな話題となった。彼は、『第一三支族』(*The Thirteenth Tribe*)の中で、パレスチナへのヨーロッパ・ユダヤ人(アシュケナージム)入植者はコーカサス山脈のトルコ民族の一派で、八世紀にユダヤ教に改宗し、その後西方へ移動したハザール人の子孫だという説を展開した。[24] イスラエルの学者たちは、ローマ時代のユダヤ人と現在のイスラエル人の間に遺伝的つながりがあることを証明しようと懸命になった。しかし、この問題は今も未決着である。

シオニズムの影響を受けていない聖書研究者による、もっとまともな研究もある。たとえば、キース・ホワイトラム〔シェフィールド大学聖書学部名誉教授〕、トーマス・トンプソン〔コペンハーゲン大学神学部教授〕、イスラエル・フィンケルスタイン〔テルアビブ大学考古学学者〕などで、彼らは聖書を史実物語とする俗説を否定した。[25] ホワイトラムとトンプソンはまた聖書時代に民族国

家（nation）が存在したとは考えられないとし、他の多くの人々と同じように、「近代イスラエルの発明」を親シオニズム・キリスト教神学者の捏造と呼んで、批判した。最も新しい「帰還神話」の脱構築が、シュロモー・ザンド（テルアビブ大学歴史学者）の二著書『ユダヤ民族の発明』（*The Invention of the Jewish People*）と『イスラエルの地の発明』（*The Invention of the Land of Israel*）に見られる。[26] 私はこの研究に敬意を払い評価するものであるが、政治的には、パレスチナ人の存在を否定する言説（ザンドはその言説を補完している）ほど重要な意味を持つものではない。一般に民族は自己発見する権利を有し、実際多くの民族主義運動は自己発見により誕生したものである。ただ、その民族創生物語が他の人々へのジェノサイド、民族浄化、弾圧という政治的行動に転じると、危険である。

十九世紀のシオニズムの主張に関して言えば、その主張が歴史的に正確であるかどうかは大して重要ではない。問題とすべきは、現在イスラエルにいるユダヤ人がローマ時代にパレスチナに住んでいたユダヤ人の子孫であるかどうかではなく、イスラエルが世界のユダヤ人全体を代表しており、イスラエルの行為はすべてユダヤ民族の利益のための行為だという主張である。この主張は一九六七年までイスラエル国にとって非常に役立った。世界のユダヤ人、とりわけ米国のユダヤ人は、イスラエルの行為が世界世論から非難されたとき、常にイスラエルを支持した。この傾向は米国ではいまだに続いている。しかしその米国でも、他国のユダヤ人社会と

同じように、イスラエルがユダヤ人全体を代表するという考え方に異論が出ている。

次章で見るように、シオニズムは元来ユダヤ人の中でも少数派の思想であった。シオニストは、ユダヤ民族は本来パレスチナに属する民族であるからパレスチナへの帰還は世界から奨励されるべきであるという考え方を形成するうえで、英国の個々の政治家、次いで英帝国、英国軍に依存した。ユダヤ人は土地なき民族であるという考え方にも、ユダヤ人一般も国際世論一般も概して納得していないようであった。シャフツベリ、フィン、バルフォア、ロイド・ジョージがユダヤ人のパレスチナ帰還に賛成したのは、それが英国のパレスチナに足場を形成するのに役立つと思ったからだった。しかし、英国がパレスチナを武力奪取してからは、もうそのことは大して重要ではなくなった。この土地がパレスチナ人のものであるかユダヤ人のものであるかは、改めて新しい視点で判断しなければならなくなった。ところが英国はその判断ができず、三〇年間ユダヤ人とパレスチナ人両者を苛々させた末に、とうとう委任統治問題を放棄し、国際連合に委ねたのである。

註

(一) Shlomo Sand, *The Invention of the Jewish People*, London and New York: Verso, 2010.

(二) Thomas Brightman, *The Revelation of St. John Illustrated with an Analysis and Scholions* (sic), 4th edn, London, 1644, p. 544.

(三) これは一六六五年一一月四日に彼がスピノザに書いた手紙の一部。Franz Kobler, *The Vision Was There: The History of the British Movement for the Restoration of the Jews to Palestine*, London: Brit Am Publications, 1956, pp. 25-6.

(四) Hagai Baruch, *Le Sionisme Politique: Precurseurs et Militants: Le Prince De Linge*, Paris: Beresnik, 1920, p. 20.

(五) Suja R. Sawafta, "Mapping the Middle East: From Bonaparte's Egypt to Chateaubriand's Palestine," PhD thesis submitted to the University of North Carolina at Chapel Hill, 2013.

(六) A. W. C. Crawford, Lord Lindsay, Letters on Egypt, Edom and the Holy Land, Vol. 2, London, 1847, p. 71.

(七) Anthony Julius, *Trials of the Diaspora: A History of Anti-Semitism in England*, Oxford: Oxford University Press, 2010, p. 432で引用されているもの。

(八) "Jews in America: President John Adams Embraces a Jewish Homeland" (1819), at jewishvirtuallibrary.org.

(九) Donald Lewis, *The Origins of Christian Zionism: Lord Shaftesbury and Evangelical Support for a Jewish Homeland*, Cambridge: Cambridge University Press, 2014, p. 380.

(一〇) Anthony Ashley, Earl of Shaftesbury, Diary entries as quoted by Edwin Hodder, *The Life and Work of the Seventh Earl of Shaftesbury*, London, 1886, Vol. 1, pp. 310-11; Geoffrey B. M. Finlayson, *The Seventh Earl of Shaftesbury*, London: Eyre Methuen, 1981, p. 114; The National Register Archives, London, Shaftesbury (Broadlands) MSS, SHA/PD/2, August 1, 1840.

(一一) Quoted in Gertrude Himmelfarb, *The People of the Book: Philosemitism in England, From Cromwell to Churchill*, New York: Encounter Books, 2011, p. 119.

(一二) *The London Quarterly Review*, Vol. 64, pp. 104-5.

(一三) Ibid.

(一四) Ibid.

(一五) *The Times of London*, August 17, 1840.

(一六) Quoted in Geoffrey Lewis, *Balfour and Weizmann: The Zionist, the Zealot and the Emergence of Israel*, London: Continuum Books, 2009, p. 19.

(一七) Deborah J. Schmidle, "Anthony Ashley-Cooper, Seventh Earl of Shaftsbury," in Huge D. Hindman (ed.), The World of Child Labour: An Historical and Regional Survey, London and New York: M. E. Sharpe, 2009, p. 569.

(一八) 拙著 *The Rise and Fall of a Palestinian Dynasty: The Husaynis, 1700-1948*, London: Saqi Books, 2010. Pp. 84, 117でこの考え方を詳述した。

(一九) Helmut Glenk, *From Desert Sands to Golden Oranges: The History of the German Templers Settlement of Sarona in Palestine*, Toronto: Trafford, 2005が、英語で書かれた数少ない本の一つで、テンプラーズに関する文献はほとんどドイツ語かヘブライ語で書かれている。

(二〇) Alexander Scholch, *Palestine in Transformation, 1856-1882: Studies in Social, Economic, and Political Development*, Washington: Institute of Palestine Studies, 2006.

(21) Pappe, The Rise and Fall of a Palestinian Dynasty, p. 115.
(22) ヴォルタの一九七〇年の論文は、"The Balfour Declaration and Its Makers" in N. Rose (ed.), *From Palmerston Balfour: Collected Essays of Mayer Verte*, London: Frank Cass, 1992, pp. 1-38として出版されている。
(23) J. M. N. Jeffries, Palestine: The Reality, Washington: Institute of Palestine Studies, 2013.
(24) 同書は一九九九年にリプリント。Arthur Koestler, *The Khazar Empire and its Heritage*, New York: Random House, 1999.
(25) Keith Whitelam, in *The Invention of Ancient Israel*, London and New York: Routledge, 1999, and Thomas L. Thompson, in *The Mythical Past: Biblical Archaeology and the Myth of Israel*, London: Basic Books, 1999. この両者からこれをテーマとして研究するCopenhagen School of biblical minimalismが生まれた。
(26) Shlomo Sand, *The Invention of the Jewish People*, and *The Invention of the Land of Israel: From Holy Land to Homeland*, London and New York: Verso, 2014.

〔訳註1〕一九四六年オーストリア生まれ。テルアビブ大学歴史学名誉教授。
〔訳註2〕この世を創造した神は未来のある時にそれを終わらせる（終末論）。その終わりの後は神に選ばれた民が永遠に生きるという考え方が、ユダヤ・キリスト教にある。仏教の永劫回帰や輪廻と違い、直線的な宗教思想である。
〔訳註3〕キリストが再臨してこの世を統治するという千年間。
〔訳註4〕西岸地区をユダヤ人は「ユダヤとサマリア」と呼ぶ。ユダヤの地にはヘロデ王国があったとされる。

〔訳註5〕『ハアレツ』のジャーナリストであるシュロモ・パピールブラットはフランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアンに関する論文で、シャトーブリアンがユダヤ人に対し、パレスチナにユダヤ人国を作りたいという陳情をするよう勧めたことを評価し、彼の友人ヴォルテールは反ユダヤ主義者だったが、シャトーブリアンはユダヤ教徒を理解した異教徒だったと称賛している。今なおキリスト教シオニズムとキリスト教の反ユダヤ主義との関連は見抜かれていないのだ。(Shlomo Papirblat, "A Century Before Herzl: The Gentile Who Preached Zionism Ahead of His Time," Haaretz.com, July 25, 2017)
〔訳註6〕労働者のために一〇時間労働法の成立に尽力した社会改良家であったが、同時に最大のキリスト教シオニストであった。ユダヤ人の味方を装いながら彼らをキリスト教に改宗させることを最終目的としていた。現在米国で猛威を振るっている親イスラエル右翼のキリスト教原理主義福音派は彼の流れを受け継いでいる。
〔訳註7〕ルカによる福音書一九、四一～四四。
〔訳註8〕イザヤ書五二、一。
〔訳註9〕第三代ドイツ皇帝兼第九代プロイセン国王。プロイセン・アイデンティティが強かったと言われる。彼はテンプラーズの入植地の一つを訪れ、「ヴィルヘルマ」と名付けた。
〔訳註10〕最初のユダヤ教徒シオニスト移民は一八八二年であった。
〔訳註11〕欧州各地で起きた一連の民衆暴動や革命で、ヨーロッパ革命とか一八四八革命とも呼ばれている。これで欧州の国際秩序だったウィーン体制が崩壊へ向かった。
〔訳註12〕列強やオスマン帝国への政治的工作を行うヘルツル等の政治的シオニズムに対して、この既成事実として移民社会を作り出す運動を実践的シオニズムと呼ぶことがある。国際的ユダヤ人資産家が援助したので、必ずしも自立的運動ではなかった。

〔訳註13〕一八四二〜一九〇八。アラブの反乱を指導し、最後にはナチ・ドイツへ逃げ込んだエルサレムの大ムフティで最高ムスリム評議会議長のアミーン・フサイニーの父。フサイニー家はオスマン帝国時代から英国信託統治終焉までの二五〇年間、エルサレムを中心にパレスチナで強い影響力を発揮した名家で、民族主義運動を指導した。

第三章　シオニズムはユダヤ教である

シオニズムはユダヤ教と同じであるという主張を正確に検討するためには、シオニズムが生まれた歴史的文脈の検討から始めなければならない。十九世紀中葉に形成されたシオニズムは、ユダヤ人文化の中ではさして重要ではない一つの憧憬にすぎなかった。それは中東欧ユダヤ人社会の中で見られた二つの感情から生まれた。一つは、ユダヤ人を平等な人間として仲間扱いすることを拒否する社会、時には法的に迫害したり、経済危機や政変で窮した政府が一般民衆の不満のはけ口としてユダヤ人迫害を奨励し、暴徒の襲撃を見て見ぬふりをする社会の中で、安全を希求する感情。もう一つは、当時の歴史家が「ヨーロッパ諸国民の春」と呼んだ民族運動の高まりの影響で、ユダヤ民族の統合を希求する感情。しかし、ユダヤ教を宗教からネーション（民族または国家）へ変えようとした運動は決して稀有なものではなかった。崩壊しつつある二大帝国――オーストリア・ハンガリー帝国とオスマン帝国――の領内には、民族または国

sapientia
サピエンティア 55

Ten Myths About Israel

イスラエルに関する十の神話

Ilan Pappe
イラン・パペ［著］
脇浜義明［訳］

法政大学出版局